第 485 号
2023 年 11 月 27 日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第 507 回(2023 年 11 月 9 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:8 人
時間:10:00～11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『妖精にさらわれた男の子 アイルランドの昔話』 W.B.イェイツ/作, N.フィリップ/編, 山内 玲子/訳 岩波書店

11 月の読書会の課題図書は、『妖精にさらわれた男の子 アイルランドの昔話』でした。詩人イェイツが聞き集めたアイルランドに伝わる昔話 19 編と、イェイツの詩 1 編が収録されています。妖精や巨人などが登場する不思議なお話が楽しめる本です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●読みづらかったが、最初にある詩が本を開くきっかけになった。本はとっつきにくいが、ひとつひとつの話には親しみやすさもあった。ヨーロッパに伝わる妖精はイメージしていた妖精と違い、人間くさくて、日本の妖怪に近いと思った。語り伝えられていることのすごさを感じた。話が似ている他の昔話や関連する本を一緒に読むと、より楽しめると思う。

●最初の詩が深い。どこかで聞いたことのあるような話がたくさんあった。こぶとり妖精の話は、こぶとりじいさんに似ていて、外国にも同じような話があることに驚いた。妖精はすてきな存在と思っていたが、妖精のイメージが変わった。子どもが自分で読むには少し難しい本だと思った。

●挿し絵の妖精が少し不気味。昔話には残酷なところがあると聞くが、この本にも亡骸を背負っていく話など、怖いところがあった。最後に 1 話 1 話の解説がある。本編を読んで、解説を読んで、という読み方をすると、もっと読みやすかったのかもしれない。書かれている言葉が昔風で面白かった。

●妖精はアイルランドの人たちにとっては身近な存在なのでは。日本の八百万の神のような感じ。アイルランドの文化を知ったうえで読むといいと思う。でも、知らないからこそ新鮮な思いで読んだ。どこかで聞いた話があるのも、文章が読みにくいのも、伝承話特有のものだと思う。最初の詩を導入にするのは、子どもには難しいかも。

●語り継がれてきた話だと思うと興味が持てた。自分が思ってもいないような妖精がたくさん出てきて、妖精の力であちこちに飛んで行ったりする。行く場所も、月などびっくりするような場所で、想像力がすごいと思った。脚色されていない、お話の原点。子どもは自分で読むより、読み聞かせで聞いたほうがよいのでは。不思議な世界に入り込める。

●詩はリズム。この詩は体の中に入ってきた。自分の子どもの頃には紙芝居の文化があった。伝承にある子どもがさらわれる話は、当時の子どもには親和性が高かった。異世界へ行くことができる。両方の世界を行ったり来たりできる想像力は、今の子どもたちにも必要。子どもにもっとお話をしたいと思った。

●アイルランドといえば、妖精と魔法。「ジェラルド伯爵の魔法」は、今も洞窟で伯爵が眠っているのかと思うとわくわくする。テレビで見たことのあるジャイアンツ・コーズウェイが舞台の巨人の伝説も楽しかった。妖精が、天国から追い出された天使たちのなかで、どうにかこの世に上陸できたものという話にびっくりした。

●ケルト文化として伝えられてきた妖精の話が、話好きなイギリス人によって語り継がれてきたとも聞いた。古いものを大切にする文化がいいと思った。妖精を「よい人たち」と呼んでいるのも楽しい。機嫌を損ねると悪さをされることもある妖精だが、恐れるだけではない、身近な存在なのだと思った。グリム童話に似た話もあり、楽しかった。

次回 12 月 14 日(木)10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室
📖『クマのプーさん』 A.A.ミルン/作, 石井 桃子/訳 岩波書店(岩波少年文庫)
※申込み・参加費は不要です。